

あの方はよみがえられました

マルコの福音書 16章 1-8節

はじめに

今日は、イースター礼拝です。イースターは、イエス様の復活を記念する日です。キリスト教にとって最大の祝祭日とも言えます。現代では、クリスマスのほうが華やかに祝われますが、古代ではイースターがとても大切にされていました。古代のある教父は、このように言っています。「イースターは、最高の祝日であり、最大の祝典である。市民的祭日やキリスト教の他の祝日をも、はるかに凌駕する。まるで星々の間の太陽のようだ」（四世紀の教父ナジアンゾフのグレゴリウス）。つまりイースターは、他のキリスト教の祝日よりもはるかに重要な祝日であるということです。

使徒パウロは、このように言いました。「**キリストがよみがえらなかったとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります**」（1コリント 15:14）。パウロは、もしイエス様が復活されなかったら、キリスト教の宣教も信仰も全く空しいと言います。つまりイエス様の復活は、キリスト教の中心的出来事、それがなければキリスト教が成り立たないほどのものであるのです。

私たちは、毎週日曜日に教会に集まって礼拝をしていますが、なぜ日曜日なのでしょう。それは、イエス様が復活されたのが日曜日であったからです。日曜日の礼拝は、キリスト教にとって欠かすことのできないものです。その日曜日の礼拝の基礎が、イエス様の復活にあるのです。このことから、イエス様の復活がキリスト教に欠かすことのできないものであることがお分かりいただけると思います。

1. マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメ

一昨日の金曜日の夜に、受難日礼拝を行いました。イエス様が十字架で息を引き取られたのは、金曜日の午後3時過ぎです。金曜日の夕方になると「安息日」が始まってしまうので、アリマタヤのヨセフという人が急いでイエス様の遺体を十字架から降ろし、亜麻布に包み、墓に納めました。

今日の聖書箇所は、「さて、安息日が終わったので」という言葉から始まります。当時のユダヤの一日は、夕方に始まり夕方に終わります。ですから安息日の終わりは、土曜日の夕方です。1節には、「**マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメは、イエスに油を塗りに行こうと思ひ、香料を買った**」とあります。「マグダラのマリアとヤコブの母マリアとサロメ」という三人の女性は、15章を見ると、イエス様の十字架を遠くから見ていて、イエス様が墓に納められるのも見ていた人たちでした。つまり彼女たちは、イエス様の十字架と埋葬の目

撃者なのです。また彼女たちは、イエス様がガリラヤにおられた時から、イエス様に従い、仕えていた人たちでした。彼女たちは、イエス様の宣教旅行に同行して、食事の用意や身の回りの世話をしていたのです。

彼女たちは、これまでずっとイエス様の身の回りの世話をしてきました。ですからイエス様が埋葬されたこの時も、イエス様の遺体に油を塗ろうと香料を買いに行ったのです。イエス様の埋葬は、アリマタヤのヨセフによって、わずかな時間で急いで行われました。安息日が迫って来ていたからです。丁寧に油を塗る時間もなかったのでしょう。イエス様の遺体には、十字架の傷、鞭で打たれた傷、茨の冠の傷、殴られた傷など様々な傷があったでしょう。ですから彼女たちは、その傷ついた遺体を油で塗ってキレイにしようと思ったのでしょう。あるいは息を引き取って数日経っているのに、遺体が腐敗した臭いを和らげるために香料を買ったのかもしれませんが。

いずれにしても、イエス様の遺体に油を塗り、香料を買うというのは、彼女たちのイエス様に対する愛の現れだと思います。彼女たちは、少しでも早くイエス様の遺体に油を塗りに行きたかったのです。ですから安息日が終わるとすぐに、香料を買いました。しかし安息日が終わるのは夕方ですから、辺りはどんどん暗くなります。ですから安息日が終わってすぐにイエス様の墓に行くことはできません。そこで彼女たちは、翌朝早くイエス様の墓に行ったのです。

2節にはこうあります。「**そして、週の初めの日の早朝、日が昇ったころ、墓に行った**」。彼女たちは、安息日が終わってから一番早くイエス様の遺体に油を塗る方法を考えました。安息日が終わってすぐには墓には行けない、しかし安息日が終わってすぐに香料を買わなければ、翌朝の早くには店が開いていない、だから安息日が終わってすぐに香料を買い、その香料を持って朝一番でイエス様の墓に向かったのです。ですから彼女たちは、その時考えられる一番早い方法で、イエス様の墓に向かったのです。彼女たちは、とにかく少しでも早くイエス様の遺体に油を塗りに行きたかったのです。それほど彼女たちのイエス様に対する愛は深かったのです。

しかし彼女たちは、急ぐあまり大切なことを忘れていました。それは、墓には非常に大きな石があるということです。墓の入り口には、非常に大きな石が転がして、墓が閉じられていたのです。彼女たちは、墓に向かう途中で、「**だれが墓の入り口から石を転がしてくれるのでしょうか**」と話し合っていたのです。

しかし墓に着いてみると、驚くことに非常に大きな石がすでに転がしてあって、墓の中に「**真っ白な衣をまとった青年が、右側に座っているのが見えた**」のです。この「真っ白な衣をまとった青年」とは、御使いのことです。そして、その御使いは、イエス様の復活をこう告げるのです。「**驚くことはありません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているでしょう。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められていた場所です。さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい。『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます』と**」。

2. イエス様の復活は、まず彼女たちに

イエス様の復活の知らせを最初に聞いたのは、彼女たちでした。弟子たちではありません。しかし8節を見ると、「**彼女たちは墓を出て、そこから逃げ去った。震え上がり、気も動転していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである**」とあります。彼女たちは、イエス様の復活の知らせを聞くと、恐ろしさのあまり、「逃げ去って」、「誰にも何も言わなかった」とあります。しかしマタイの福音書では、彼女たちはイエス様の復活の知らせを伝えに行き、弟子たちはガリラヤでイエス様とお会いするということが書かれていますので、実際には彼女たちは、弟子たちにイエス様の復活の知らせを伝えたのだと思います。しかしあまりにも驚きと恐れが大きかったということが、マルコの福音書では強調されているのだと思います。

ではなぜ御使いは、彼女たちの口を通して弟子たちに、イエス様の復活の知らせを伝えたのでしょうか。当時、女性というのは社会的な立場が十分に認められていませんでした。人間として重んじられていませんでした。ですから女性の言葉も軽んじられたのです。ましてや何かの証人としては認められませんでした。しかし神様は、福音にとって最も中心的なイエス様の復活の知らせを、あえて女性たちに託されたのです。彼女たちがイエス様の復活の知らせを弟子たちに伝えたからこそ、全世界にイエス様の復活の知らせが届いたのです。イエス様の復活という福音にとって最も中心的なメッセージが、当時軽んじられていた女性たちに託される、それが神様の御心だったのです。

クリスマスのイエス様の誕生の知らせも、当時社会的に軽んじられていた羊飼いたちにまず知らされました。イースターの知らせは、まず女性たちに、そしてクリスマスの知らせは、まず羊飼いたちに知らされました。神様の福音のメッセージは、いつも社会的に軽んじられている者たちに託されるのです。使徒パウロは、このように言いました。「**神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されているもの、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです**」。神様は、「この世の愚かな者」「弱い者」「取るに足りない者」「見下されている者」「無に等しい者」を選ばれ、神様の御心を行われる方なのです。

3. 非常に大きな石が転がしてあった

彼女たちが墓に着くと、墓の入り口の非常に大きな石は、転がしてありました。墓の入り口をふさぐ、非常に大きな石は、死を閉じ込めておくものです。私たち人間は、死という現実の前に無力で、それに打ち勝つことはできません。その意味で、死の力に閉じ込められているとも言えます。しかしイエス様は、復活を通して、非常に大きな石を転がし、死の力を打ち破られたのです。死の前に立ちはだかっていた非常に大きな石、人間の力によって決して取り除けることができなかつた非常に大きな石は、イエス様によって取り

除かれたのです。この死の力を打ち破られたイエス様を信じる時、私たちはもはや死の力に閉じ込められることはなくなるのです。もちろん、私たちは誰でも死にます。しかし死の意味が変わるのです。死はこれまで罪の報酬、裁きでしかありませんでした。しかし死からよみがえれたイエス様を信じる時、私たちの死は天国への入り口となるのです。そして裁きではなく、救いとなるのです。あらゆる労苦から解き放たれる安らぎの時、すべての行いが報われる時となるのです。

4. 弟子たちとペテロに

御使いは、彼女たちにイエス様の復活の知らせを伝えるだけでなく、「さあ行って、弟子たちとペテロに伝えなさい」と言っています。弟子たちとペテロ、彼らはイエス様が十字架につけられた時、見捨てて逃げてしまった人たちです。特にペテロはイエス様を三度も知らないと言って、呪いをかけて誓った人です。そんな彼らに御使いは、メッセージを伝えようとするのです。彼らは、罪意識に苦しんだでしょう。イエス様を裏切った罪責感に苦しんだでしょう。

イエス様は弟子たちよりも先にガリラヤへ行かれます。それは弟子たちを迎えるためです。弟子たちを迎えて、暖かく包むために、イエス様は先にガリラヤへ行かれるのです。もしイエス様が復活されなかったら、弟子たちは罪意識に一生苦しめられて過ごしたでしょう。もしイエス様が十字架で死なただけであつたら、彼らは一生イエス様を裏切った罪悪感に苦しんだでしょう。彼らは、イエス様が復活され、ガリラヤでイエス様に迎えられたからこそ、罪の赦しを確信し、福音を力強く証しすることができたのだと思います。彼らはイエス様を見捨てました。しかしイエス様は彼らを見捨てることはなさらないのです。彼らに赦しをもたらすために、罪の意識から解放するために、イエス様は復活されたのです。パウロは、こう言います。「もしキリストがよみがえらなかつたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます」(1コリント 15:17)。またこうも言いました。「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました」(ローマ 4:25)。このことから、私たちの罪の赦しや救いは、イエス様の十字架だけでは完成しない、イエス様の復活がなければ完成しないということがお分かりいただけると思います。

おわりに

さて今日は、イエス様の復活の出来事を学びました。イエス様の墓は空っぽでした。その空っぽの墓で鳴り響いていたのは、福音のメッセージでした。死に対する勝利のメッセージ、罪に対する赦しのメッセージでした。それは、私たち人間の根本的な問題である、罪と死に対する勝利のメッセージでした。神様はこの福音のメッセージを、この世の「愚かな者」「弱い者」「取るに足りない者」「見下されている者」「無に等しい者」にまず伝え、彼らを通して全世界に伝えられるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

イエス様が復活されなければ、私たちの死はただの絶望でしかありませんでした。イエス様の復活により、私たちの死に希望が生まれました。またイエス様の復活がなければ、私たちに罪の赦しはありませんでした。私たちは生涯罪の意識に苦しめられていました。またイエス様の復活がなければ、社会的に軽んじられている者たちは、見下されているままでした。イエス様が復活されたからこそ、先の者が後になり、後の者が先になります。イエス様の復活は、私たちの拠り所です。これからも、イエス様が復活された日曜日に、毎週礼拝をささげさせてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。